

ヴィオロンさん 以下、あなたのお書きになったブログのご意見

杉本徳久 Sugimoto Norihisa <sugimotonorihisa@gmail.com>

2010年12月15日 5:03:19 JST

(杉本氏がいっばしの評論家か、もしくは異端審問官のように、他のクリスチャンの書いたブログの文章を片端から取り締まろうとしている様子が標題によく表れている。だが、要するに、自分に気に入らない記事に対してクレームをつけずにいられないだけである。しかも、このメールは、ヴィオロン、救世軍山谷少佐、唐沢治氏にまとめて送られているが、救世軍の山谷少佐とは私は会ったこともなく、当時から関わりがほとんどなかった。杉本氏が私宛の文章を山谷少佐に送らねばならなかった必然性はまるでない。杉本氏は常にこのように、特定の人物に対する誹謗中傷をできる限り多くの人間に広めては、自ら敵とみなした人間のイメージダウンを狙い、信者が互いを軽蔑し合ったり、疑心暗鬼に陥って連帯できないよう分裂工作をしかけるのが常套手段であった。一つの事件を限りなく膨らませて、できるだけ多くの人間を傷つけるきっかけとして来たのである。)

前略、ヴィオロンさん

「吉祥寺の森から」の杉本です。

以下、あなたのお書きになったブログのご意見、拝読いたしました。

<http://makotono.tou3.com/Entry/309/>

こちら、私のことを評された文章ですね？ 違いますか。

(上記の記事は、杉本氏がこのメールの末尾に引用しているように、「兄弟たちを告発する者(=悪魔)」に対する信者の勝利の宣言である。だが、この記事に杉本氏の名前は一切登場していない。にも関わらず、杉本氏はいつものごとく、勝手な決めつけの解釈により、それが自分のことを指していると確信して、自ら名乗り出て来たのである。自分が悪魔になぞらえられていると、誰も指摘していないのに、名乗り出て来たのだから、これはすごいことである。よほどの自覚がなければ、決してそのような解釈はできまい。

最近、私はかなり綿密な分析を通して、杉本氏が次々とクリスチャンを訴えて来たことが、「日夜、兄弟たちを訴える者」である悪魔の所業に非常に近いものであり、その根底に流れる思想が非聖書的なものであることを指摘して来たが、少なくとも、この当時はまだ

そこまで細かい分析には至っていなかったし、杉本氏を名指しして記事を書いたこともなかった。それにも関わらず、杉本氏の内心では、自分が悪魔と同類の仕事に手を染めているという自覚があり、そうであるがゆえに、悪魔に対する糾弾を、自分に対する糾弾と受け取ったのである。このように、同氏自身が悪魔と自分を同一視していたことは、極めて興味深い事実である。)

以前、あなたは唐沢治と揉め事を起こした「ニュッサ」に対して書いた文章について私が指摘した際には、あの文章は私を念頭に置いたものではないと弁明なさいましたが、今回のそれは私以外ありえないように感じられます。

いかがなんでしょうか。

(杉本氏は、私の書いた文章を冷静に読むことができず、私がブログにおいて非難する人物はすべて自分を指しているのだという被害妄想に勝手に陥っていた。そのような決めつけしかできなかったのも、私に対するよほどの罪悪感に苛まれていたからに違いない。筆者から依頼したたった一件のコメントの削除にも応じず、むしろ、それをきっかけとして、一千件のコメントを伴うバッシング記事を掲載して筆者のイメージを傷つけ、それから長年に渡り、執拗に嫌がらせ記事を書き続け、こうして恫喝メールを送りつけた。自分がどれほどひどいことをしているか、内心で自覚がなければ、そのような「解釈」は起きなかったであろう。杉本氏の良心の呵責がそのような決めつけと被害妄想を生んだのである。)

元鳴尾キリスト福音教会信徒として、また、現、KFCの唐沢を慕い互いに兄弟姉妹の信頼で結ばれたメンバーとして、あなたが経験されている混乱と漂流は、私も理解しないわけではありませんが、以前も申し上げた通り、他の独裁カルト被害者の人たちが被害を訴える働きを一方的になじったり、自分の信仰的感性に合わない人を一方的にサタン呼ばわりするような幼稚な真似は、市民社会において許容されないということ、まだわかりませんか。

(またもや「市民社会」の登場である。杉本氏の愛用語である。同氏はこうして、自分が世論を代表しており、自分のクレームは、無数の「市民」によって支えられているのだという印象を醸し出し、自分のクレームがあたかも「世論」そのものであるかのような印象を与えることを狙っているのである。だが、実際には、カルト被害者の中にも、杉本氏や、村上密氏の行き過ぎた手法に愛想をつかして去って行った人々は多く、杉本氏の活動は、

決して「他の独裁カルト被害者の人たち」からも積極的に支持されていたわけではなかった。さらに、市民からの支持となれば、全くと言って良いほどなかった。杉本氏が勝手に「市民社会代表」や「被害者代表」を名乗っているだけで、同氏の主張には裏づけがなかったのである。

さらに、私は杉本氏を名指ししてサタン呼ばわりしたことはない。このブログにおいても、杉本氏の思想と活動がどのような点で非聖書的であり、誤っており、反キリストの霊、悪魔的な思想だと言わざるを得ないか、かなり詳細に分析し、指摘することはあっても、杉本氏＝サタンと名指ししたことはない。

むしろ、自分が神になってキリスト教界に君臨し、他者の内心や著作物を取り締まろうとし、自分の感性に合わないクリスチャンを一方向的に敵扱いして、ネットでなじったり、法廷に引きずり出して処罰したりすることで、キリスト教界の言論を弾圧しようとしているのは杉本氏の方である。キリスト教界全体を取り締まり、弾圧しようとすることは、それ自体、神の宮に君臨し、自ら神になろうとしていることと同じであり、そのような願望は、決して聖霊から来るものではなく、悪魔以外には出どころがないが、この事実について、杉本氏はどのように考えているのであろうか。

さらに、「あなたが経験されている混乱と漂流は、私も理解しないわけではありませんが」とはどういう意味であろうか。鳴尾教会で村上密が引き起こした「混乱」についてはまだ理解できるとしても、「漂流」とは何か。杉本氏がKFCをきちんとした教会とはみなしていなかったことがよく分かる文章である。同氏から見れば、教団教派に属していない教会は、教会ではなく、そこにいる信徒はただ「漂流」を重ねているだけということになるのだろう。村上氏と杉本氏が鳴尾教会が単立化することにどれほど反対したかを思い出したい。杉本氏らは、人間のお墨付きのない教会は教会とはみなさないとはいいたのである。だが、そのような考えは、まるで政府公認の教会しか認められていなかった共産主義国のようにあり、そのような解釈だと、日本全国の無数の単立教会は、どういう立場になるのだろうか。宗教法人としてもみとめられていない開拓伝道所にいる信徒は「漂流」していることになるのか。そもそも、なぜ杉本氏が、何が教会であって、何が教会でないかを決められるのか。プロテスタントの信者でもないのに、一体、何様のつもりなのだろうか。

杉本氏は、神が承認されたものをエクレスシアとみなすのではなく、人の承認を受けたものこそ「教会」とみなしているのである。しかも、そこで言う「人」とは、杉本氏自身のことなのだから、杉本氏が自ら「神」となって、何が教会であり、何が教会でないかを定義していた高慢さがよく分かる文面である。同氏の考えでは、キリストの御霊によって内的に承認された信徒らが、二、三人、主の御名によって集まるところに、神も共におられるというあの聖書の御言葉は、無いも同然なのである。

だからこそ、杉本氏は、「唐沢を慕い互いに兄弟姉妹の信頼で結ばれたメンバーとして」という言葉を再三に渡り、妬み深く繰り返すのである。常に煽情的な言葉を用いて他者の人間関係を三流映画のように定義し、「唐沢を慕うヴィオロン」というイメージを盛んに作り

上げようとしたのも杉本氏であるが、私はルーク氏を慕って KFC に行ったわけではなく、エクレシアの集まりを模索している過程で、ルーク氏の理念に賛同できる部分があったので接触をはかったのであり、そのことは当ブログを読めばすぐに分かることである。だが、杉本氏には、信仰の問題や理念の問題が全く理解できないので、すべてを感情論で片づけることしかできないのである。

いずれにせよ、杉本氏は、「[兄弟姉妹の信頼の絆で結ばれた](#)」エクレシアの存在が、妬ましくてならなかったようである。実際に、悪魔にとって、エクレシアは激しい妬みと憎しみの対象だということを思い出す必要がある。悪魔は、信者の連帯が大嫌いなのである。そこで、常に信者の信頼の絆を引き裂き、互いに対立させ、軽蔑させ、憎み合わせようとする。杉本氏の一連の恫喝メールは、信者同士が互いを疑いの目で見、互いを厄介者扱いして、嫌い合うようになり、決して信頼や連帯が生まれないようにするための「空気作り」であり、その心理効果を狙って、特定の信者を嘲笑する文面を無関係な信者にまで送り付け、信者同士の連帯を盛んに阻止しようとして来たのである。

暗闇の勢力の激しい妬みがあってこそ、後年、アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団の信徒による KFC の乗っ取りという事件も起きたと筆者は理解しており、その背後には、やはりアッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団とカルト被害者救済活動の支持者らの影響が間違いなくあったと推測しているのだが、杉本氏の言葉は、当時から、KFC や、組織に属さないクリスチャンの素朴な集まりに対するどうしようもない妬みや、憎しみ、破壊願望を感じずにいられない内容であった。そのような思いが出て来るのは、おそらくは同氏が、自分はエクレシアからは完全に疎外されており、兄弟姉妹の愛と信頼の交わりには決して永久に入ることができない人間だという内なる自覚があってこそではなかったかと思われる。つまり、同氏はクリスチャンを名乗っていながらも、自分も兄弟姉妹の一人だという自覚が全くなかったのであり、自分もキリストの御身体であり、愛と信頼や調和に満ちたエクレシアの一員であるとは、さらさら思っていなかった様子が伺えるのである。)

[あなたの放浪がどこまで続くのかわかりませんが、あなたが考え、あなたが公に書いていることは、年月が重なるにつれてだんだんとカルト的妄想が膨張し、自己愛イメージが悪化してゆく一方のようにお見受けいたします。](#)

(「[自己愛イメージ](#)」、これも意味不明な杉本用語である。「[自己愛](#)」という言葉は杉本氏は筆者に対して盛んに多用するが、それを通して同氏が言わんとしていることは、「俺様を批判することなど許せない」という一言に尽きる。はっきり言えば、自己愛に満ちているのは杉本氏の方なのである。己の欠点が見えず、自分にとって都合の悪いことはすべて他者に転嫁して他人を非難するという点で、「[自己愛性人格障害](#)」と言っても差し支えない。自分を批判する人間はみな敵とみなして猛攻撃に及ぶ点で、「[カルト的妄想](#)」も然りである。

さらに、杉本氏が「自己愛」という言葉を多用して他人を非難しているのは、同氏が、「組織の枠組みに属さない」ことを「わがまま勝手な振る舞いをしている」ことと同一視し、「キリスト教の牧師や教師などの権威者に服従しないこと」を、自己中心で身勝手な信仰生活と解釈しているからに他ならないと筆者はみている。

つまり、杉本氏にとっては、公の組織に属さない信者の信仰生活はどこまで行っても、組織や「社会」に盾突くものであり、「身勝手な自己愛」でしかなく、そのような「放埒な生き方」は許せないという発想しか持てないのである。一体、聖書が「先生と呼ばれてはならない」と言っていることや、教会とは人の作った地上の組織ではないという点をどう考えているのであろうか。おそらく、杉本氏には「神への愛」というもの自体が全く分かっていないのであろう。そのために、同氏は、教会生活とは、組織に属し、人間に奉仕することであり、立派で道徳的な生活を送り、弱者の味方として行動し、社会に貢献することだと勝手に勘違いしているのであろう。そういうことはみな、この世の慈善事業ではあり得ても、信仰そのものとは全く関係ない事柄であることが分からないのである。）

以前はあなたから私への面会、対話を希望されるメールを何度もいただきましたが、近時、あなたからは何の音信もなくなりましたが、ブログではあれこれ自由にご意見を仰ることはできるようです。あなたの信頼する唐沢や山谷からも、その後、民事提訴についての説明さえ、何らも返事はありません。

あなた方、社会を舐めているのではありませんでしょうか。

（この文章には、思わず笑ってしまう。「杉本氏=社会」なのだそう。何しろ、私と唐沢氏と山谷少佐が、みんなでもとめて「社会をなめている」のだそうだから、可笑しくてならない。しかも、なぜここで三人を一緒くたにして論じなければならないのか、全く必然性がない。私の知っている限り、唐沢氏が杉本氏に対して予告した民事提訴に関して、山谷少佐は一切、関係なく、私が山谷少佐を信頼していると述べた事実もない（第一、山谷少佐とは面識そのものがないに等しい）。にも関わらず、杉本氏には「みんなから一緒になって馬鹿にされている」という思い込みが消えず、悔しさが拭い去れないようである。さらに、私は杉本氏に会って対話しようという提案を一度しか行っておらず、杉本氏の言うように、何度も面会を希望した事実も存在しない。従って、この杉本氏の文面を見ると、「もっと俺様を振り返って欲しかったのに、おまえは最近俺様のことをほとんど気にかけていないようだから腹が立つ」と屈折した恨み言を述べているとしか思えない。こんな方法でしか他者への関心を示せないとは、何という惨めかつ哀れな心境だろうか。）

申し上げておきますが、私は自己愛と妄想で脳内がばんばんに張り詰めた人間からサタン呼ばわりされて、しょげたり傷ついたりするようなナイーブな人間ではありませんので。

あまりに当たり前のことでありますが、ご自分の書かれた文章には責任をお持ち下さいますように。

（相変わらず、陳腐な罵倒語を使ってしか、他者に関われない哀れな人間である。「自己愛と妄想で脳内がばんばんに張り詰めた」とか、どこからそんな台詞を思いつくのだろうか。杉本氏のメールには常にこのような陳腐な紋切り型の台詞ばかりが並んでいるが、このように下劣な文章しか書けない人間であることを哀れに思う。

自分が名指しされているわけでもないのに、他人の書いた記事を引き合いに出して、これだけ人を罵倒せずにいられないところを見ると、「しょげたり傷ついたりするようなナイーブな人間ではない」という同氏の言葉も、強がりでしかなく、かなり疑わしいものを感じる。同氏が悪魔に対する批判を自分に対する批判と同一視していることも、滑稽であるが、自分に対するほんのわずかな批判も許すことができず、少しでも自尊心が傷つけられたと感じると、他者に対する猛烈な報復行為に及ばざるを得ない短気で自己中心で身勝手な性格がよく分かる文面である。そもそも、自分の名前が出されていないにも関わらず、自分が非難されていると勝手に誤解し、その思い込みを根拠に、これほど大袈裟に騒ぎ立て、他者を罵倒し、無関係な第三者にまで悪口を広め、迷惑を及ぼさずにいられないのだから、自己愛が強すぎるのは明らかに杉本氏の方であろう。自己を絶対化し、自分への批判を黙って受け流すことができず、他者の指摘を真摯に受け止めて反省することもできず、自分の美的イメージが穢されることにいささかも我慢がならず、どんな手段を使っても、報復する。聖書に照らし合わせ、そこまで自分の美的イメージに固執する存在は、確かに悪魔以外にはいない。キリストは、ご自分が誹謗されたり、誤解されたり、恥を受けるときにも、己を低くされ、決して報復行為に及ばなかった。そこで、杉本氏の行動が、いかに信仰者にふさわしいものでないかは、万人の目に明白であり、こうして、たとえ悪魔と名指しされても全く不思議ではないほどの、様々な異常な性格と行動の特徴を自ら惜しみなく人前に披露しているのに、なぜそれを指摘されて憤慨できるのだろうか。自分の行動がクリスチャンの「市民社会」にどう映るか、同氏には自覚を持ってもらいたい。「責任」という言葉も、杉本氏の愛用語であるが、自分が傷つけられたと根拠もないのに勝手に誤解し、その誤解をもとに他者にいわれなく不法な私刑を加えて報復行為に及ぶことを正当化する、そのような思想の持ち主に語れる「責任」などない。自らの行動に責任を取らなければならぬのは、杉本氏自身である。

以下は、当時のヴィオロンの文章であるが、今日も内容をいささかも否定する必要を感じない。特定の人間を名指ししていなくとも、クリスチャンを次々と法廷に引っ張り出しては罪に定め、弾圧を加える人間の所業が、信仰者よりも、むしろ悪魔を彷彿とさせるものであることは、信者ならば誰しも同意する事柄である。これを読んで良心の呵責を覚えるならば、その者は、キリスト教徒を弾圧するという、呪われた罪深い行為を早急にやめることである。神がその愛する独り子を身代わりの犠牲としてまで、義とされた信者を、再び罪に定めようとする者は、神の判決に逆らっているものであり、それによって自ら罪に定められ、恐るべき報いが降りかかるであろう。そんな生き方からは早く離れることである。)

日夜兄弟たちを神の御前で訴える者

2010/12/11「今や、私たちの神の救いと力と国と、また、神のキリストの権威が現れた。私たちの兄弟たちの告発者、日夜彼らを私たちの神の御前で訴えている者が投げ落とされたからである。

兄弟たちは、小羊の血と、自分たちのあかしのことばのゆえに彼に打ち勝った。彼らは死に至るまでもいのちを惜しまなかった。

それゆえ、天とその中に住む者たち。喜びなさい。しかし、地と海とには、わざわいが来る。悪魔が自分の時の短いことを知り、激しく怒って、そこに下ったからである。」(黙示 12:10-12)

悪魔の主要な特徴はクリスチャンを告発することです。ですから、四六時中、偽りによってキリスト者を告発し、圧迫し続けるような者は、まさにサタンの特徴を帯びており、その悪しき行動と思いによって、自分が身も心も悪しき霊によってとりこにされ、占領されていることをはっきりと示しています。

しかし、ハレルヤ！ キリストと共に死に、よみがえり、御座に引き上げられ、天に住む聖徒たちには、あらゆる悪しき力に打ち勝ち、蛇を天から投げ落とす権威が与えられます！ そして神の国の到来と共に、悪しき軍勢は天から投げ落とされているのです！

「さて、七十二人が喜んで帰って来て、こう言った。「主よ、あなたの御名を使うと、悪霊どもでさえ、私たちに服従します。」

イエスは言われた。「わたしが見ていると、サタンが、いなずまのように天から落ちました。確かに、わたしは、あなたがたに、蛇やさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権

威を授けたのです。だから、あなたがたに害を加えるものは何一つありません。

だがしかし、悪霊どもがあなたがたに服従するからといって、喜んではなりません。ただあなたがたの名が天に書きしるされていることを喜びなさい。」(ルカ 10:17-20)

私たちは告発者を前にする時、何をすれば良いのでしょうか？ ただ十字架のうちにとどまり、安息します。そして、御名の權威を持って敵を叱ります！

「主はサタンに仰せられた。「サタンよ。主がおまえをとがめている。エルサレムを選んだ主が、おまえをとがめている。」(ゼカリヤ 3:2)

告発されているのは、聖徒たちではなく、サタンです！ 神は大祭司ヨシュアの前で、サタンを罪定めなさいました。私たちは知っています、サタンと暗闇の軍勢はすでにまことの裁き主・まことの大祭司の御前で、天の法廷に立たされ、最高の法廷に訴えられたこと、そして、カルバリで、彼らに対する仮借なき有罪判決が下り、彼らの行く末はすでに火の池に定められていることを！！

それを知るなら、私たちに何を恐れることがあるでしょう。聖徒たちは、子羊の血と証の言葉に立ち続け、御名の權威により、全ての悪しき力、はかりごとを打ち破り、天から龍と悪鬼を投げ落とし、御国が地上に来たことを大胆に宣言する權威が与えられているのです！ それにより、サタンの不法占拠は終わり、キリストの統治がこの地にもたらされるのです！ 私たちは天に住む者ですから、喜びましょう、命の書に自分の名が記されていることを喜びましょう！

1 8 0 0 0 0 1

武蔵野市吉祥寺北町 1-5-1 4

杉本徳久

sugimotonorihisa@gmail.com